

都立立川短大 ○大竹美登利 伊藤セツ
昭和女大短大 森ます美 天野寛子

目的：楢葉・桑田らの夫妻を組にした家政学的視点に立つ生活時間研究を受け継ぎ発展させるために、これまで時間量の平均のみならず、時間帯、寸断度、世帯家事労働時間帯の新しい分析を試みてきた。'80年代に入りいっそう複雑化する家庭生活の時間的側面を把握するため、主な行動に附随する二・三次行動や、変化する家事労働と行為者の意識を結びつけた新しい生活時間調査を実施した。この調査は家庭経営学領域での調査方法、分析手法を批判的に検討してきたわれわれの、家庭生活をより科学的に把握することをめざした新しい調査方法の試みでもある。

方法：調査対象は、都市勤労者の家庭生活の問題を最も鮮明に示すと思われる東京都民に限定、広報紙『都のお知らせ』(446万部)を使って調査協力の意志のある夫妻を公募。1498組の応募者の中から、全都にまたがるように配慮し、I妻常勤 II妻無職 III妻パートの三つの世帯形態ごとに、a.若夫婦 b.末子三才未満 c.末子三才以上就学前 d.末子小学生、e.末子中学生以上(以上核家族)の四つのライフステージと、f.拡大家族とを一定数ずつ得られるよう計300組を有意に選定。調査期間は1980年9月の平日、休日各1日ずつ。調査票は、原らの松山調査を参照し、主な行動の他、二・三次行動、生活行為をした場所、一しょに行動した人、家事については義務の度合を記入させる他、家事労働、生活環境についての実態・意識調査票、疲労自覚症状調査票も附した。本報では、調査方法、調査対象の特徴、アンケート部分を中心に報告する。

表 調査対象について

有効数	平均世帯		平均年齢	
	人数(人)	天	妻	夫
I	93	3.56	34.6	33.7
II	102	3.96	39.7	36.3
III	98	3.95	39.4	36.4
	293	3.82	38.1	35.5